

CESCHI NEWS LETTER

京都大学大学院文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター ニュースレター

センター設立記念シンポジウム「文化遺産でつなぐ人文知

—京都からユーラシア世界へ、原始から未来へ—

9月13日（金）、文学研究科第3講義室で、京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センターの設立を記念するシンポジウム「文化遺産でつなぐ人文知—京都からユーラシア世界へ、原始から未来へ—」を開催しました。平日午後の開催でしたが、多くの参加者がありました。

吉田豊・磯貝健一「羽田亨の夢を追って—京大文学部内陸アジア学の軌跡—」では、京都大学元総長で内陸アジア学を確立した羽田亨とそれを継承・発展させた研究者、そして羽田記念館で行われているさまざまな研究・教育活動について紹介されました。

吉川真司「京都大学構内を発掘する」では、京都大学構内遺跡の調査研究成果と、保存・活用の実情と今後の展望が報告されました。

吉井秀夫「文化遺産学の新たな展開」で

は、その概念が変化しつつある「文化遺産」をキーワードとして、「学問」・「社会」・「世界」とつながるための試みについて報告がなされました。

松田素二「人文知の新たな連携を目指して」では、人文知が置かれている状況に基づいて、人文知連携拠点が行おうとするミッションについての報告がありました。

パネルディスカッションでは、出口康夫から「人文知は今・・・」という題目で、人文知とその発信の現状と課題や文化遺産学の可能性についての提言がなされ、それに松田・吉井が答えつつ、今後のセンターの活動の方向性について議論を深めました。

今回のシンポジウムでの議論をもとに、今後、さらに文化遺産学センターの活動を具体化していきたいと思えます。



文化遺産学・人文知連携センター(CESCHI)とは

文化遺産学・人文知連携センターは、日本における内陸アジア研究の拠点の役割を果たしてきた文学研究科附属ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）と、京都大学構内遺跡の発掘調査・研究を進めてきた文化財総合研究センターを再編・統合しつつ、人文学諸分野を横断・総合する研究を進め、その成果を組織的に発信することを目的として、2019年4月に設置されました。

本センターは、「文化遺産学研究施設」と「人文知連携拠点」から構成されています。

文化遺産学研究施設は、前身の両センターの活動実績を継承しつつ、日本国内のみ

ならず、世界各地の文化遺産の保存・活用に関わる研究を広く展開していくことを目的とし、比較文化遺産学創成部門・京大文化遺産調査活用部門・内陸アジア学推進部門・ユーラシア宗教遺産学部門の4部門から構成されています。

人文知連携拠点は、文化遺産学研究施設の調査研究成果をはじめとして、文学研究科の諸専修が蓄積してきた研究成果を横断的に連携させることを通して、新しい学知の創造を目指します。また、学内外諸機関との連携を強化しつつ、人文知の成果を広く社会に発信することを目指します。

センター開催行事日誌(2019年4月～8月)

■2019年7月2日(火) 16:30～16:55

(京大文化遺産調査活用部門)

ショートトーク：この足もとから発掘された家形埴輪

■2019年7月6日(土) 14:00～18:00

(内陸アジア学推進部門)

第12回近代中央ユーラシア比較法制度史研究会

■2019年7月13日(土) 14:00-17:30

(内陸アジア学推進部門)

第82回羽田記念館定例講演会

■2019年7月18日(木)～10月6日(日)

(京大文化遺産調査活用部門)

京都大学文書館企画展「この地に百三十年

ー吉田キャンパス成立史ー」(於：京都大学百周年時計台記念館1階 歴史展示室)に、本部構内から出土した尾張藩屋敷関連資料を出品。

■2019年7月29日(月)～8月2日(金)

(内陸アジア学推進部門)

満洲語文語夏季講座2019

■2019年8月3日(土)、4日(日)

(内陸アジア学推進部門)

グローバルな視点でみるユーラシア大陸：第五回清朝と内陸アジア国際学術研究会

■2019年8月31日(土)、9月1日(日)

(京大文化遺産調査活用部門)

東海縄文研究会 第8回例会

京都大学大学院文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター

〒606-8501 京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科

URL：http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/ces-top_page/

